

カネを積まれても使いたくない日本語

親しくしている 30 歳前後の青年にものを問われて、それに答えたら「マジスカ」と言葉が帰って来た。女性に珍しい野菜をあげたら「これって食べれるんですか？」と、そして「油で炒めて塩コショウで美味しく食べられる」ことを教えたら「ウッソー」。

テレビを見ていると、インタビューに答える人が「チョーうれしい」と叫んだり、アナウンサーがゲストを「XXX をなさっておられる YYY さん」と紹介する。

国会中継を見ると、巷では先生と呼ばれる方々が「XXXX をやらせていただいております」の連発。日本語が乱れまくっており、それが若者言葉で乱れていると思いきや、年代を問わずおかしい言葉を乱発している状態が散見するどころか耳に付くようになってきた。世界に一つしかなく、同じ言語を使う国が他に存在しないという大事な日本語が、日本人の手によって破壊されつつある。この現象に気が付いたのは 15 年か 20 年位前になるが、今や驚きを通り越して腹が立ってきた。

ある朝、食後に朝日新聞を一面から順に見ていたら、一面の最下段の新刊書籍の広告欄で面白いタイトルの本を見つけた。「カネを積まれても使いたくない日本語」。タイトルに魅かれて覗いて見ると、朝日新聞社が出している朝日新書で、著者は内館牧子氏だということがわかった。

都心へ出ることがあったら、ついでに八重洲ブックセンターか OAZO に立ち寄って買って来ることにして、メモ用紙に書いて机の横に貼り付けた。

予てより気になって仕方がなかった耳障りな言葉は、文法的におかしい「ら抜き言葉」と用法的にもおかしい「過剰敬語・過剰謙譲語」、若者言葉の中から出来たと思われる「とかとか言葉」と怪しげな表現の「かな表現」。さらには「奇妙な短縮語」と響きの悪い新造語。その他例をあげて見たらきりが無いほどに数多くの「おかしい日本語」が飛び交っている。

冒頭で例示したように「食べられる」は「食べれる」になり、「見られる」は「見れる」になる。この程度の誤用ならばいくら我慢が出来ただろうが、近頃ではさらに変形して「行かれる」が「行ける」になったりしている。しかも 40 歳代 50 歳代はおろか、60 歳代の人までがこんな言葉を使っている。例をあげたら紙面が足りなくなるので、これで止めておく。

「小林さんは、月にどの位の日数を畑で過ごされていらっしゃるんですか？」と聞かれたことがある。テレビやラジオでも「されていらっしゃる」「やられておられる」などの二重三重に敬いまくった過剰な表現が横行している。

また、前述の「ら抜き」が広まっているのに反して尊敬・謙譲・丁寧の表現では、「ら付き」がやたらに使われている。「受身表現のやられる」と「尊敬・謙譲・丁寧表現のやられる」が混在しており、誤解を受ける可能性もある。

国語辞典の説明によれば、「とか」は、①例をあげて並べて表現する時に使う言葉 ②「言う」「聞く」などの言葉を合わせて内容が不確かな場合に使う言葉。

前者の場合の用例は、「四本足の動物と言うと、犬とか猫とか・・・」「食べるとか飲むとかしなさい」など特定の対象物に限定できない時に、例示列挙するような表現で使われるのが正しい。

後者の場合の用例は、「山本さんとかいう人」のように対象が特定できてはいるがやや不確実な時に使う。しかしながら近頃の用法だと、「シネコンとかへ行って映画とかを見る」と言うような、特定の対象物に限定できているにもかかわらず「XX とか」というような使い方をしている。

「XXX してもよいかなと思う」のような不要な「かな」が煩い。しかも、政治家やしかるべき責任ある仕事をしている人が、「早期避難がよいかなと考えている」というような無責任な発言が目立つ。明快な断定の表現がされてしかるべき時にまで「かな付きの表現」をされると、「良いのか悪いのかははっきりしろよ！」と言いたくなる。

謙譲の意を持って「やらせていただく」「させていただく」などの表現をすることがあるが、これも乱発しすぎて鼻につく。自らの本意ではないが、大衆が望むことにより引込みが付かず大役を引き受ける時などに使われる表現だが、今やあらゆる場面で使われている。トンネル内の災害事件を受けて、類例の防止策として関係機関が総点検を実施するにあたり「年内をめどに総点検をやらせていただく」という表現をした。このような場合は、自らの意思で行うものであれば「やる」と表現すべきところを

「やらせていただく」となると、「自分では点検が必要とは思っていないが皆がやれというので、渋々やる」と聞こえてくる。ニュース報道を見ていると、あらゆる場面で「自らの責任において、自らの意思で義務を果たす」場合にまでこの表現が使われているのは、いただけない。「お前はどの立場で物を言っているのか？」と問いかけたくなる。また更に、「やらせていただく」の変形として「やらさせていただきます」という奇妙な日本語までが登場している。

「何気に・・・」という表現も飛び交っている。「何気ない」という言葉は「これと言った考えもない。深い考えもない。特に注意、関心もない」という意味の言葉で、用例としては「何気ない素振りで・・・」など無意識な動きなどを示す表現である。それが「何気に」というおかしな表現法になり、しかも「何気にかわいい」のような、まったく異質な使い方までが横行している。

お店で買い物をする時、一万円札を出すと店員に「一万円からでよろしいですか？」と言われる。一昔前は、「細かいのがないので一万円でよろしいですか？」と客の方から聞いたものだ。「一万円で支払うことの是非を問うのはお前ではない」と言いたくなる。おまけに「一万円から」とは何だ？

そしてお釣りが帰って来る時には「9,250 円とレシートのお返しです」と来る。釣り銭は返すものだが、レシートは返すものではなく、差し上げるものはずだ。一昔前は「9,250 円のお返しです」と言った。コンビニエンスストアや外食チェーン店等へ行くとこの種のおかしなやりとりが山ほど体験できる。

耳障りな言葉遣いが山ほどある中から、その一部だけを取り上げて見た。このような、文法や用法を逸脱したおかしな言葉遣いが若者の世界に限られるのかと思ったら、50 歳代・60 歳代の人からも伺うことができる。70 歳代・80 歳代になるとあまり聞いたことがない。これは何を意味しているのだろうか。いずれにせよ、古くからの伝統の良さを言い伝えて行くべき老人世代に至るまでこのような状態では、この先が思いやられる。

そして、内館牧子著「カネを積まれても使いたくない日本語」を手に入れた。著者が予てより気になっていたこの問題について、アンケート調査などで情報を集めた上で、それぞれの具体例に付いて分析とコメントを加えてまとめたものである。この書籍の内容の説明は省くことにするが、興味がある方は是非ご一読願いたい。私がこれまでに感じていたことがほぼ語り尽くされており、読んでみて一層の満足感を感じた。昨今「国土を如何にして守るか？」の議論がにぎやかではあるが、「母国語を如何にして守るか？」も重要な課題である。「国土を守る」時の敵は外国であるが、「母国語を守る」時の敵は何と日本人、すなわち自分たち自身であることを再認識しなければならない。

以上